

# 一年保育児と二年保育児の比較

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西 憲明  
尾田 郁子  
黒崎 牧子  
木股 晴子

目的 幼稚園で、二年保育児の二年児と一年保育児とを同様なカリキュラムで指導したり、両群を混合して保育する場合には、種々の問題が起りやすい。従って、一年間の保育経験をもった幼児群と新入園一年児群との指導を変えねばならないが、どういう点に着目し、これに基いた指導をどう展開すればよいかは、容易に解決できない問題であろう。つきに、この問題に接近するための予備として、両群の差異的特徴をまず抽出しようとした。

## 方法

(一)居住地域の異なる幼稚園、二園を選び、各園について、一年保育児と二年保育児群につき、田研式家庭環境診断テストを実施して、両群の環境条件の等質なものを選びだした。この場合のテストは母親の評定結果を保育者がさらに検討して修正した得点で算出した。(二)この家庭水準で略等しい両群に、さらに阪本D式知能検査を実施して、知能水準の等しい集団の両群にまで構成した。即ち、家庭的要因、知能的要因を等しくした場合の一年保育児と二年保育児の対に、次の三面から検討しようとした。(三)牛島式社会的生活能力検査を実施したが、両群に有意差が認められなかった。(四)桐原式人物画を実施したが、この場合にも、両群間に有意差が認められなかった。(五)保育者に、幼児が描いた自由画を、三段階に評定してもらったもの

のについて、その分布を両群で比較したが、有意に二年保育児群に優れていると評定されたものが多かった。(六)さらに前記知能検査の下位問題について両群を比較したが、二年保育児が有意に得点の高かったものは、系列問題と生活常識の問題のみであった。

結論と考察 以上の結果では二年保育児は、一年保育児よりも生活常識が優れ、知能とは異った描画的表現のうまさ認められた。勿論ここで用いたのはベーパー式知能検査と、評定式検査であり、一般的傾向の抽出を狙った整理の結果である。さらに、具体的な事態における問題解決のしかた、情意的傾向、社会的交渉性についての検討は残されている。

(大会発表論文抄録73—74頁)

## 在園時の記録と進学後の傾向

(第二報)

神田寺幼稚園

高園 敏子・石村 紀子  
福永かをり・坂上 徹子  
深野 浩代・高木喜代子

目的 在園時の評価と進学後の学業成績・行動記録を比較調査して、今後の保育の参考とする。

対象 神田寺幼稚園卒業生 六年二二名、五年二四名、四年二一名、三年一九名、二年一四名、計一〇〇名。

参考資料 1、在園時の知能テストの記録、2、在園時の生活の記録及び指導要録、3、小学校児童指導要録、4、小学校担任の評価調査方法及び考察 1、在園時の知能テスト(WISC)を、言

語性IQと動作性IQに分け、就学後の各科目の成績への影響をみる。国語では、はっきりと言語性IQの上・中・下がそのまま成績にあらわれ、算数、社会、理科、図工、音楽、体育においても、言語性の劣った者の成績が悪くなっているが、体育に、動作性上のグループが、動作性中・中下グループより、やや成績が良いという動作性IQを中心にした動きもみられる。全科目通してみて、言語性IQの方が、動作性IQより、就学後の学業成績に影響すると言える。

2、在園時の性格から就学後の傾向をみる。在園時の記録から、やりとげる、やりとげないという項目に焦点をしばって、二つのグループの傾向をみたが、幼児期におけるこれらの性格は、就学後もはつきりと生活全体に強く影響している。即ち、やりとげるグループは全て良い傾向にあり、やりとげないグループは、悪い傾向にある。

3、六領域と就学後の教科との関連性をみる。幼稚園の六領域のうち、音楽リズム、絵画製作、自然、健康の四領域を選び、就学後の音楽、図工、理科、体育などとの関連性をみたがその領域に対して全面的に良かった子ども（即ち、充分興味もあり、能力もそれに伴っていた子ども）は就学後においても、それぞれの教科で優れた成績を示しているが、幼稚園と小学校の評価の観点が違うことから、必ずしもこれらの四領域と教科とは関係あるとは言えない。

4、在園時、特異な存在だった子どもの就学後の傾向をみる。在園時、性格、知能、身体面で特異な存在だった子どもについて、その成長のあとをみてみたが、幼稚園時の性格は、就学後もかなり強く残っているが、知能は低くても、努力次第でその子どももなりの活躍もみられる。しかし、身体が弱いということは、集団生活をしていく上にマイナスの点が多い。

5、在園時、特に教師の注意をひいた子どもを、個人的に就学後の状態をみる。この場合も、本人の努力に加えて、家庭の努力、学校の、級の環境が、その子どもにも与える影響は大きい。

結論 知的に優れた者は、成績も上位にあるが、知能以上に性格が、種々の面で生活全体に影響しており、情緒、社会性に良い傾向を持ち、積極的な意欲を持った子どもが、結局、自分の能力を最大限に生かして進んでいくのではないかとということである。また、性格の上にねばり強さがいかに大切かという事も、あらためて感じた。私たち保育者には、音楽リズム、絵画製作と手段の方に気をとられて、もっと大切な目的の方を忘れている時があるように思う。勿論音楽、絵画などの各々の面を伸ばしていくことも大切ではあるが、それら全ての土台になるもの、即ち、人間形成ということにもっと力を入れていくべきだと思う。それと共に、小学校との連絡の問題も考えていかねばならない。幼稚園を卒業させてしまえば、それで責任が終ったというのではなく、幼稚園時代につちかわれたものが、就学後も素直に伸びている事をみとめてこそ、私達保育者の責任が果せたと言えるのではないだろうか。（大会発表論文抄録34頁）

## 保育効果の研究

日本女子大学  
愛育研究所

村山 貞雄  
多田 淑子  
関根 隆子  
杉内 輝子

保育の観察場面を一斉保育、与える場面、誘導の三つの場面に限